

## 追 悼

日本のプラントハンター — 富樫 誠さん  
Mr. Makoto Togashi (1911–1998), A Tireless Plant Hunter

元気で活力の塊のような富樫さんが、1998年11月8日に亡くなられた。心から御冥福をお祈りいたします。生前、敬愛の念をこめて、富樫さんと呼んできたので、ここでも富樫さんと呼ぶことをお許しいただきたい。

晩年の朝比奈泰彦先生の地衣類研究を支えた最大の功労者は富樫さんです。富樫さんを朝比奈先生に紹介したのは、本誌の編集委員を勤められた佐々木一郎先生であったと聞いています。多分1945年以降のことで、その頃富樫さんはすでに一流の維管束植物の採集家でしたが、地衣類はなじみがなかったのか、最初のうちは朝比奈先生と同行されることが多かったようです。しかし、数年のうちに地衣類採集のコツを完全に会得されたように見え、まもなく富樫さんは単独で各地へ採集に出かけ、先生の期待に充分応えるような興味ある採集品を、先生のもとへ続々届けられるようになりました。朝比奈先生も富樫さんの採集品が届くことを、いつも心待ちにしておられました。富樫さんの採集品に基づいて朝

比奈先生が記載された新種や日本の地衣フロラに加えられた種を、ざっと数えてみても50種以上におよぶものと思われます。新種の中には *Letharia togashii* (ナヨナヨサガリゴケ) や *Cetraria togashii* (トガシアワビゴケ) のように、富樫さんに献名されたものもあります。富樫さんが発見された地衣には、予想をはるかに凌ぐような珍品がありました。*Thyrea latissima* (オオバキノリ) もその一つでした。オーストラリア地域特産属と考えられていた *Thysanothecium* の新種、*T. japonicum* (フクレヘラゴケ) も富樫さんの発見です。日本産地衣の5珍品として、カニメゴケ、ヘラゴケ、フクレヘラゴケ、ツブミゴケ (*Gymnoderma insulare*)、オオバキノリを挙げるとすれば、そのうちフクレヘラゴケとオオバキノリは富樫さんの発見によるものです。こうした珍品を発見された蔭には、長年にわたって鍛えられた植物を見る目の確かさと、プラントハンターとしての天才的な能力があったと思われます。この間の富樫さんは地衣類だけでなく、多数の種子植物も採集されたのですから、植物分類学に対する貢献は筆舌では語りきれないほどです。しかし、この辺りのことを、富樫さん自身が文章に書き記したり、記録に残されたりすることはほとんどありませんでした。富樫さん自身の手になる、本誌43巻10–11号に掲載された「地衣類思い出話」は、知る限りでは唯一の記録です。

黒川は富樫さんと二人だけで採集旅行をしたことは一回だけしかありません。1958年夏、八ヶ岳へ出かけたことです。その前年、偶然の機会に武田久吉先生を案内したという、高橋というガイドに遭い、八ヶ岳、横岳の西斜面にある大同心、小同心を案内してもらったことがあります。この話を富樫さんにしたところ、どうしてもそこへ行ってみたいということになり、朝比奈先生のお許しを戴いて採集に出かけることになりました。大同心、

小同心へは登山道はなく、横岳と硫黄岳の間のジョウゴ沢を詰めて稜線まで登り、横岳の頂上近くから、西側の断崖絶壁をカニの横ばいのように降りるもので、案内なしではとても通れない難所ですから、再び高橋氏のガイドをお願いしました。大同心、小同心は高山植物の宝庫で、富樫さんの喜びは普通ではありませんでした。其の途上でヤツガタケシノブの大群落があり、富樫さんは大喜びで、標本集1セット分の標本を採集されました。山小屋に帰って夕食を終わったころ、ガイドの高橋氏がこっそりやってきて、あんなに植物をむやみに採集する人をなんで連れてきたかと詰問されました。富樫さんはむやみに植物を採集する人ではなく、その採集品は世界の植物学者の研究に役立っていることを説明して、了解を得たことを覚えています。現今、植物採集そのものが罪悪視される偏った考えがありますが、標本が分類学の研究を支える必要不可欠な基本であるかぎり、植物採集は避けられないことです。私利私欲のために植物を乱獲することは論外ですが、植物標本がなくては分類学の研究が進展しないという事実は再認識すべきだと考えます。あの時ガイドの高橋氏に説明した通り、富樫さんの採集品は、日本だけではなく、世界中の植物学者によって研究の対象とされています。採集品が世界中の植物学者によって活用され、分類学に貢献することが、プラントハンター、富樫誠さんの夢だったのではないのでしょうか。

1966年、武田薬品(株)を定年退職されるに当たって、大阪～東京間を直線で結ぶ約400

kmの徒歩採集旅行をやったのけられ、終点の皇居前で、大事に背負ってきた白花マンジュシャゲの球根を、宮内庁庭園課職員に手渡されました。これは皇居の土手に紅白のマンジュシャゲを咲かせてみたいという意図からで、新聞紙上でも話題となったものです。

植物採集ばかりでなく、富樫さんは栽培や育種も熱心で、定年後に住まれた富士山麓の敷地内では、たくさんの外国産植物を栽培していました。中でもフキタンポポ(*Tussilago farfara*)の発芽に意欲を燃やされていましたが、なかなか発芽しないのは、早春に開花結実する種子は直播きに限ると気づかれ、フランスから採取直後の種子を空輸して播いたところ見事に発芽し、わが国で初めて開花するまでに至りました。このことは本誌49巻6号に自ら書いておられます。

東京大学の初期のヒマラヤ調査では、停滞中といえどもキャンプ地のまわりで山のように採集し、その押し葉作りが終わるとまた一回りして、前とは違う植物をどっさり集めてくるといふ具合で、休んでいるのを見たことがありませんでした。これらの標本が、わが国のヒマラヤ植物研究の基礎資料になっています。現地の人達とすぐに仲よくなるのも富樫さんで、友好には言葉の壁などないことを教えられました。ご子息による告別式の通知には「植物採集で国の内外に旅をさせていただき、人一倍楽しい人生を過させていただきまし」とありました。まことにうらやましい人生だったと思います。

(黒川 道、布 万里子、金井弘夫)